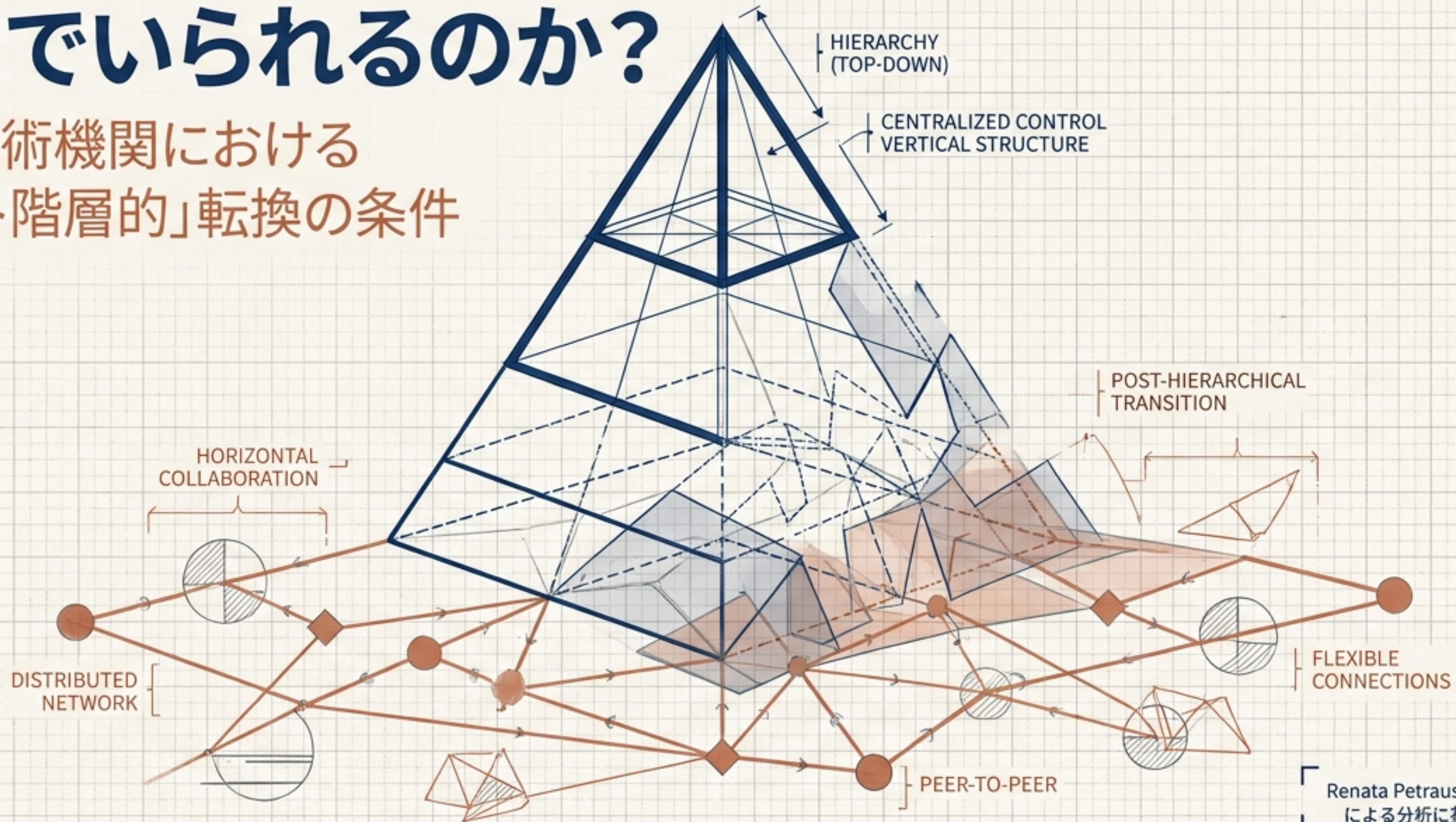


ケアの制度は階層的な ままではいられるのか？

現代美術機関における
「ポスト階層的」転換の条件

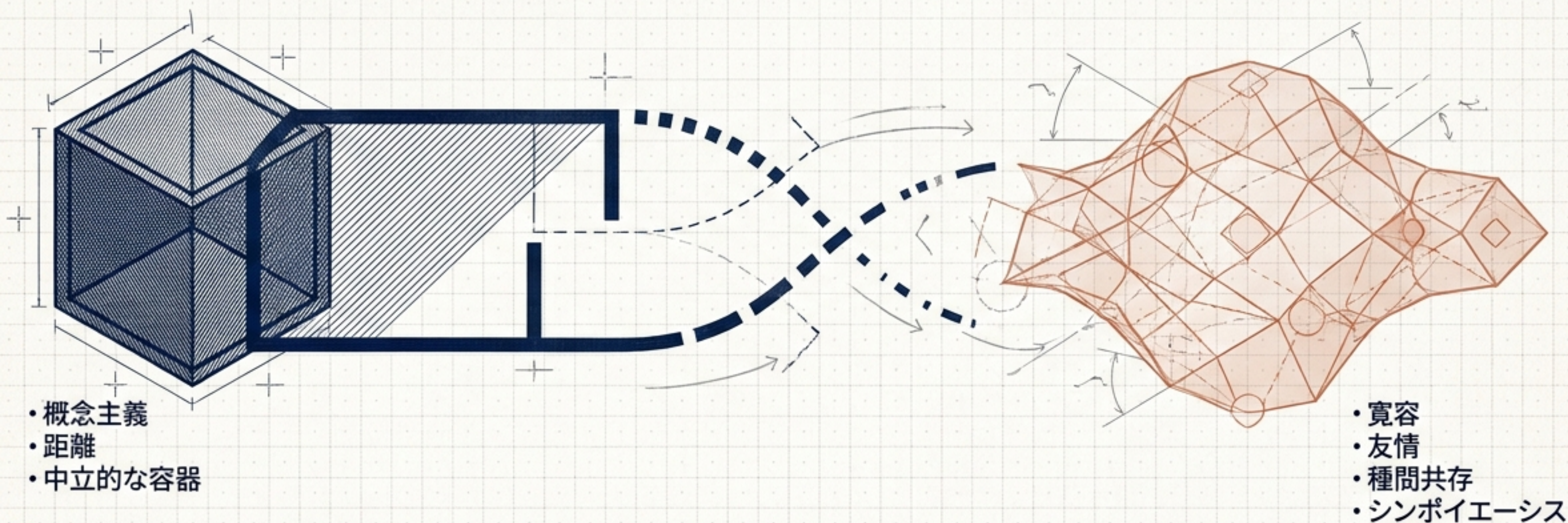


Renata Petrauskaitė-Juodeikė
による分析に基づく構造的解剖

閉鎖性からケアへ。キュラトリアルな転換の兆し。

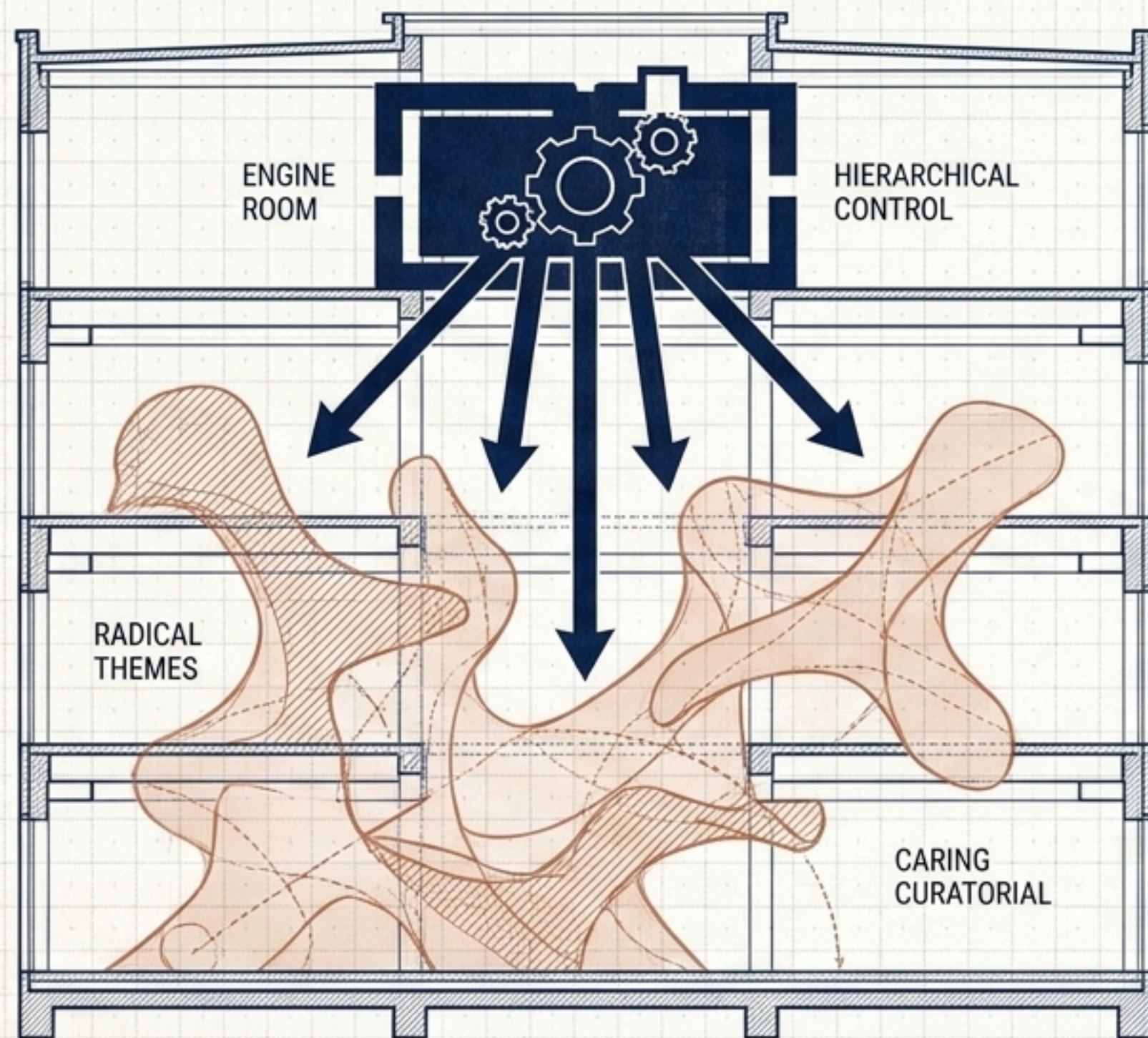
閉鎖性・エリート主義

ケアとポストヒューマニズム



ヴィリニウス現代美術センター (CAC) などの近年の展覧会 (『スーパーグループ、あるいは友だちの作り方』や『壁は夜行性動物である』など) は、機関が「中立」を捨て、脆弱性や不可視の権力へと明確に応答し始めた兆候を示している。

美術機関は「中立的な容器」ではない



Key Insight:

権力構造を不変のまま、権力制度を批判できてしまうというパラドックス。

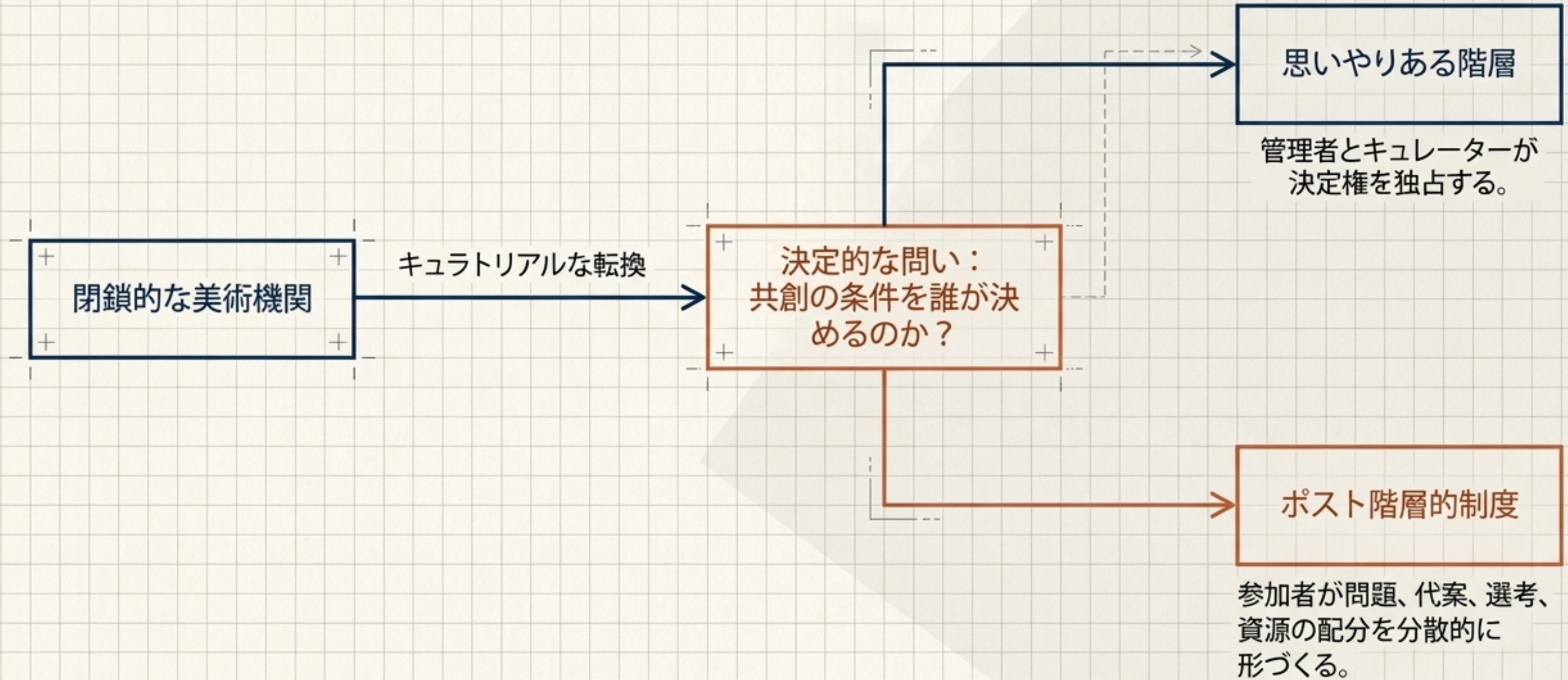
- 機関は完成作品を展示するだけではない。何が公共的議論に入り、どの経験が承認されるかを決定する。
- 戦争、植民地主義、不可視の権力への批判でさえ、制度の基盤構造が変わらなければ、単なる「美的で商品化可能な見世物」に中和される危険がある。

**問い：「制度が何を語るか」ではなく、
「それを誰が決めるのか？」**

キュラトリアルなテーマは
ケアや友情へと拡大した。

**しかし、なぜ「この」特定のテーマ、作家、視点がケアや共創を代表するのか。
その条件を設定する権利を、誰が持っているのか？**

ポスト階層的分岐



思いやりある中心も、依然として中心である。



『スーパーグルー』の矛盾：

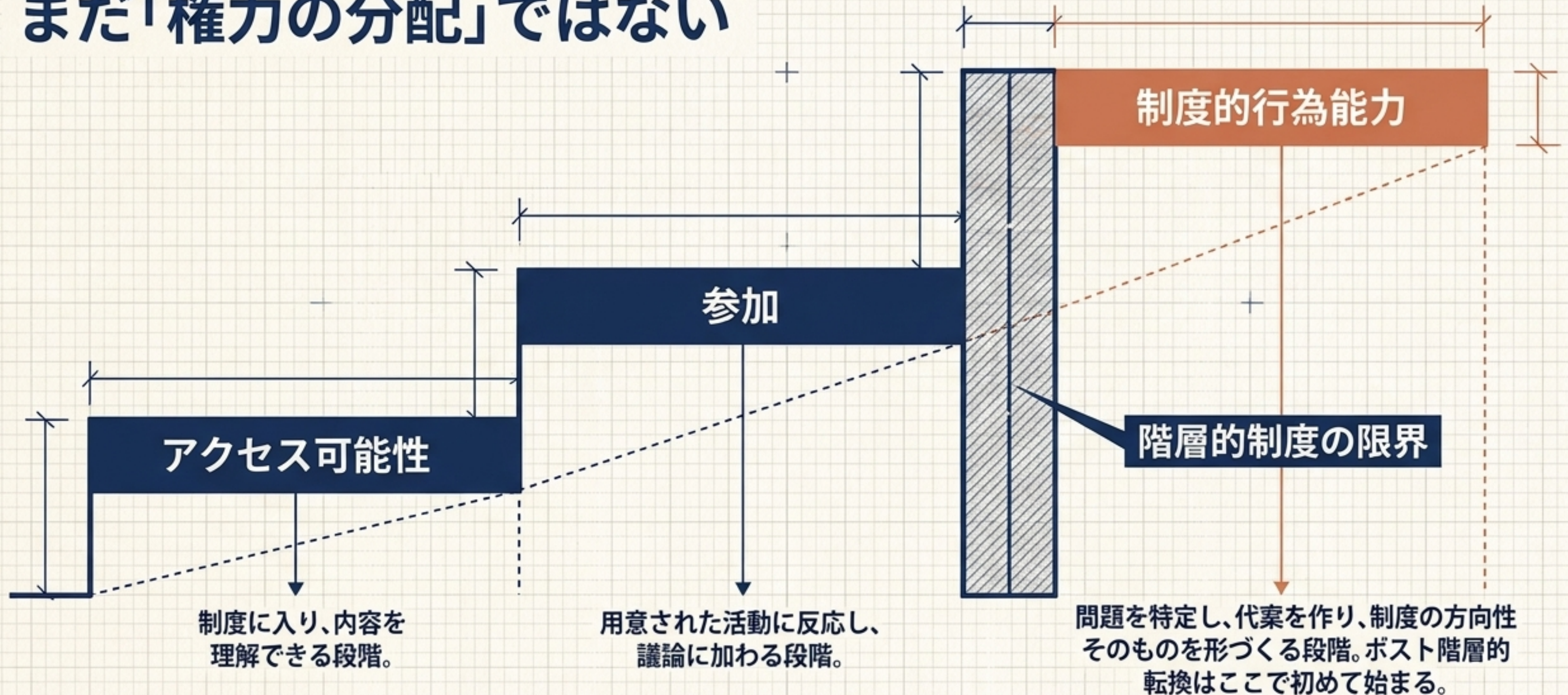
展覧会は親密さや境界の破壊（シンポイエーシス）を語りながら、物理的な彫刻に触れることを固く禁じる。

構造的現実：

観客は「想像上の境界」を越えるよう促されるが、その境界のルール自体（選考、解釈語彙、空間の掟）を定める制度に対しては、一切の作用を及ぼすことができない。



観客参加は、 まだ「権力の分配」ではない

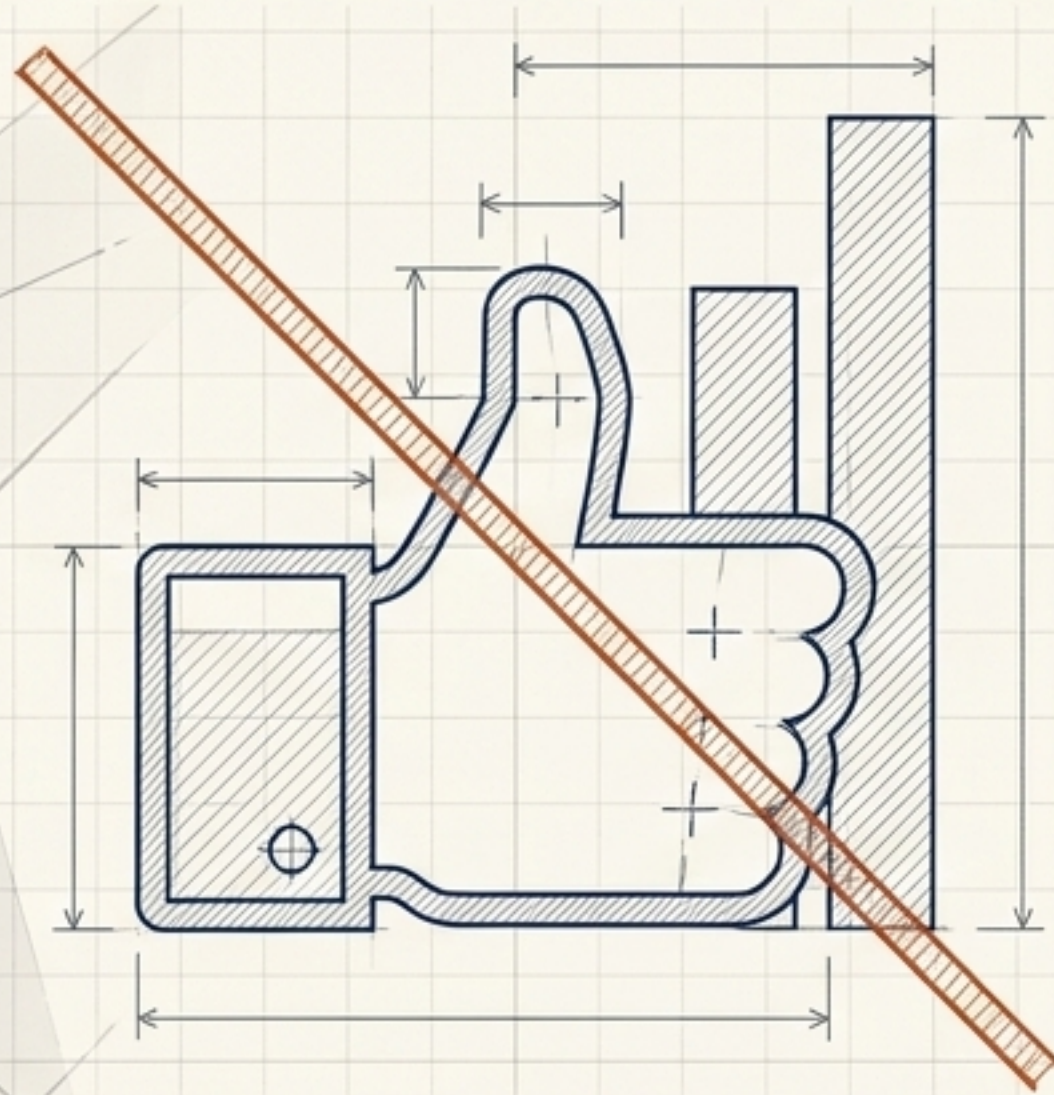


2つの異なる制度：診断マトリクス

思いやりある階層	ポスト階層的制度
中心がケアのプログラムを「選ぶ」	参加者がプログラム自体を「形づくる」
キュレーターが包摂対象を「決める」	問題と代案が分散的に「形成される」
観客は体験と解釈に「招かれる」	観客が制度的知識に「寄与する」
周縁集団に可視性を「与える」	当事者が可視性の条件を「共同決定する」
共創が「展示テーマ」になる	共創が「意思決定方式」になる
外部の不可視の権力を「批判する」	制度自身の選考権力が「可視化・検証される」

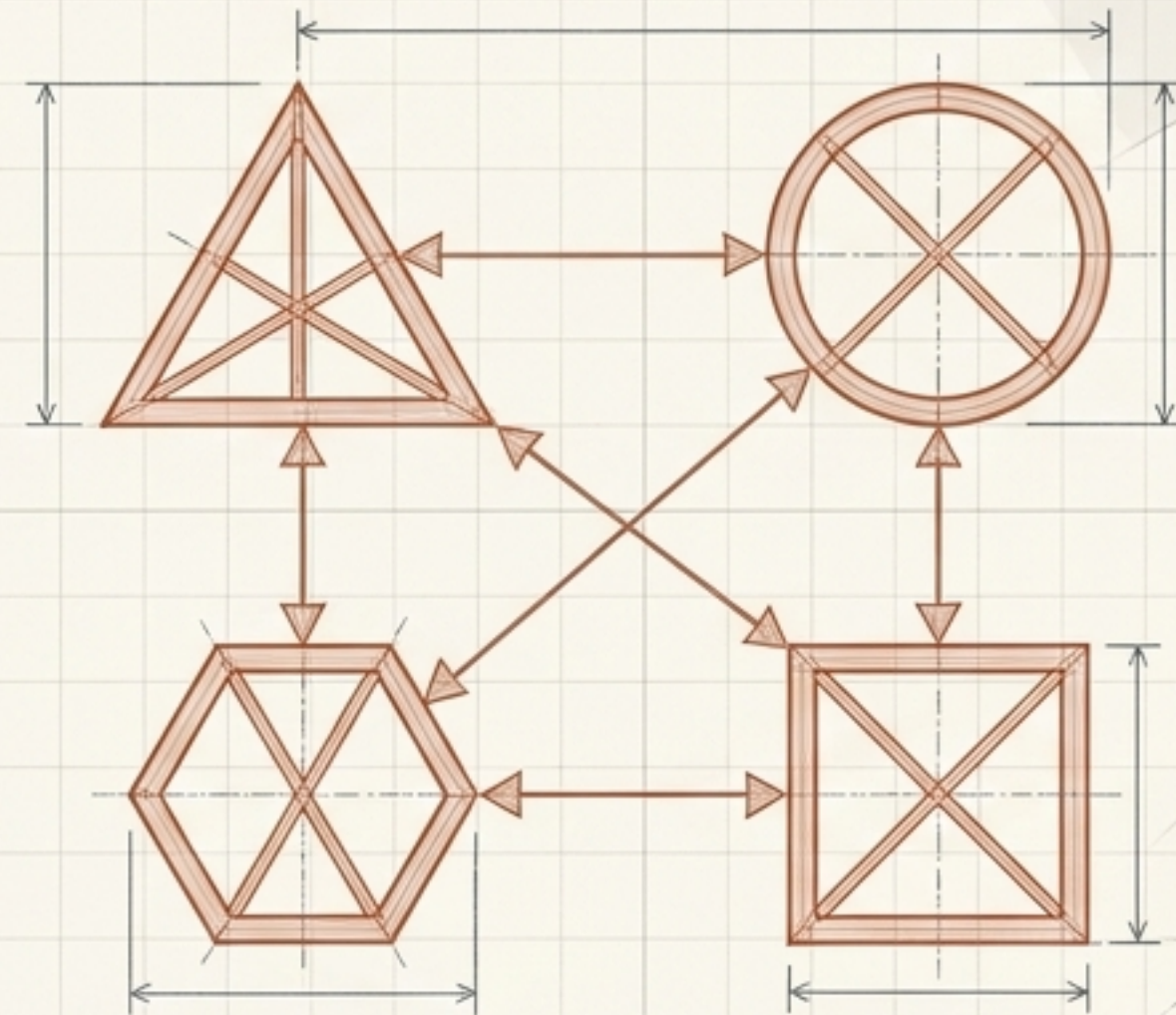
権力の分配は「人気投票」ではない

多数派支配 / プラットフォーム順位



文化をアンケートに、芸術的価値をプラットフォームの「いいね」数に還元することは、少数派の視点や専門性を破壊する。

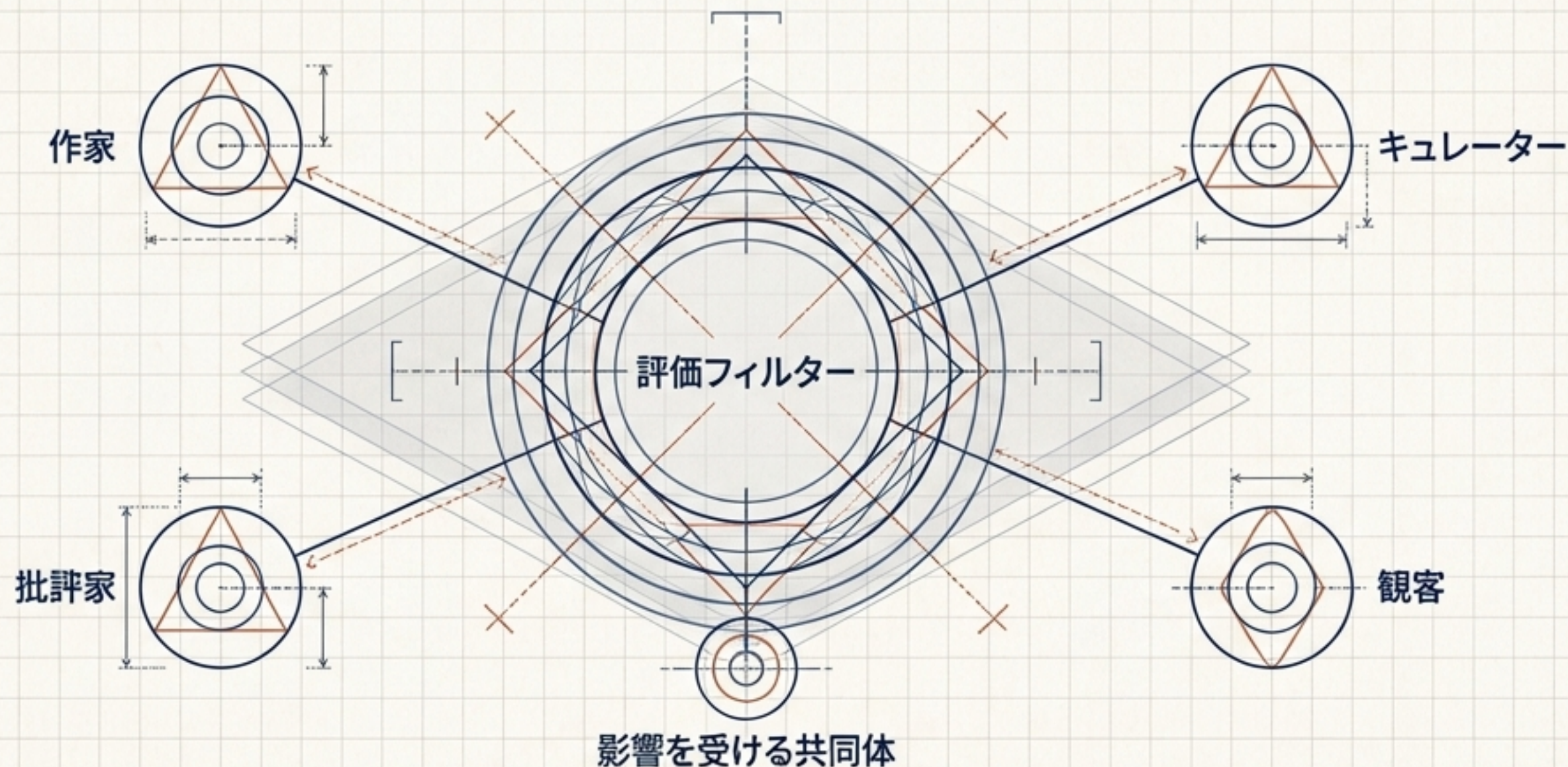
専門性の分散と連携



パラダイムシフト: ポスト階層は専門性を廃止するのではない。芸術的、歴史的、倫理的な「専門性」と、意思決定の「独占」を切り離すことである。キュレーターの提案は絶対的な決定ではなく、専門的に根拠づけられた「一つの代案」となる。

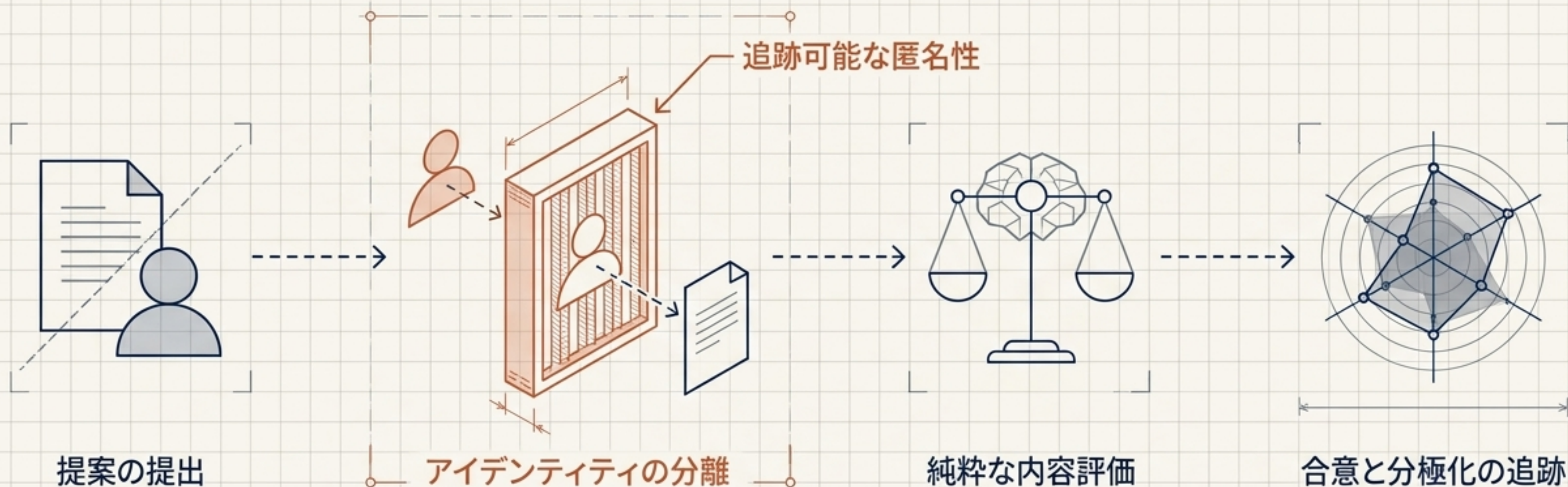
解決策：「集合知」の環境

閉じた内部協議への依存からの脱却



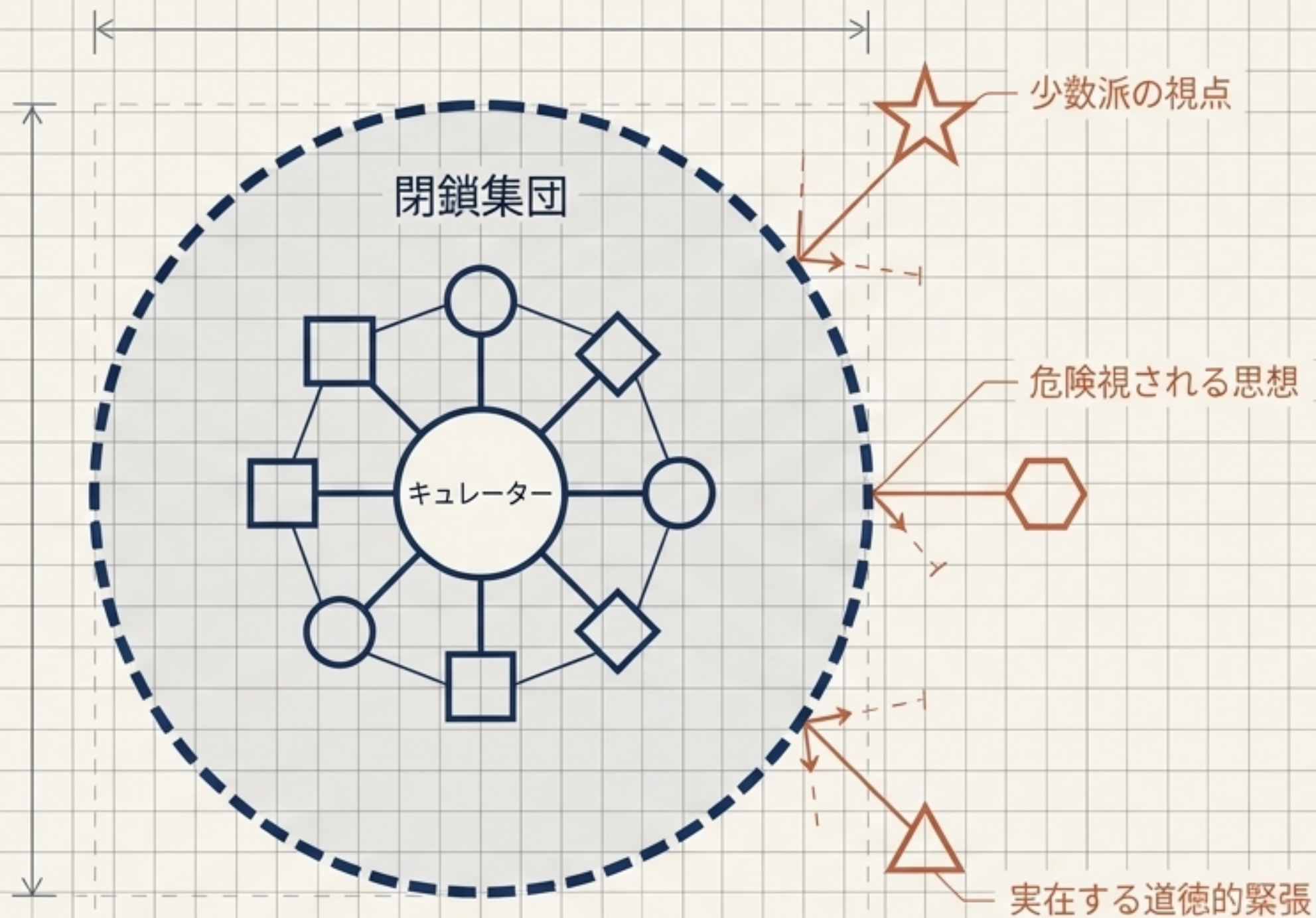
公的文化機関は、継続的な集合知のインフラとして機能しうる。
多様な参加者が既存案を評価し、重複しない独創的な提案を出し合うことで、見落とされた問題や未発見の作家、資源配分の代案が明らかになる。最終決定をアルゴリズムに委ねるのではなく、構造化された結果に「従う理由」や「逸脱する理由」を公に説明する責任（キュラトリアルな責任）が生まれる。

メカニズム：追跡可能な匿名性



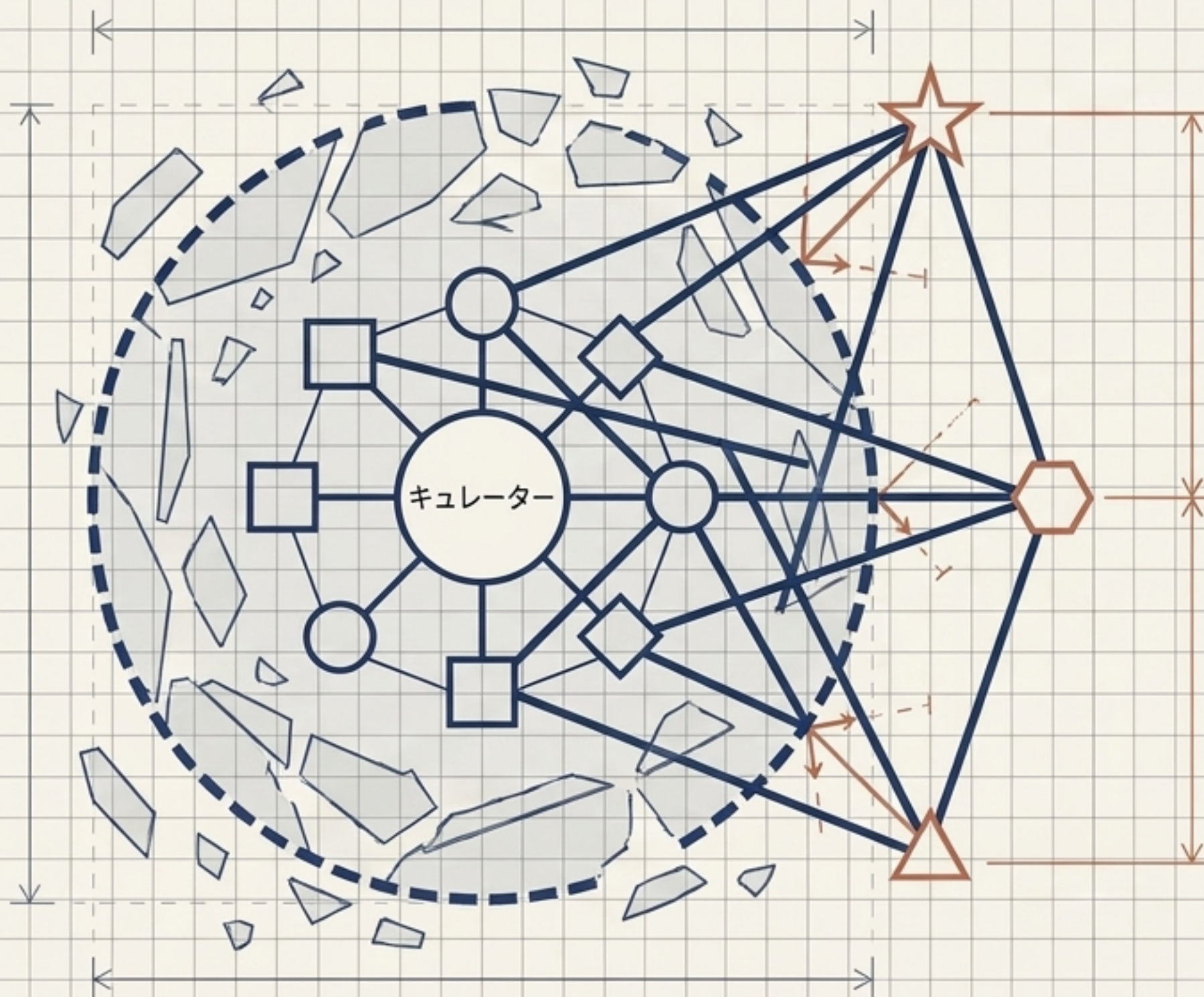
名声、役職、所属といった要素が、提案の重みを自動的に決定することを防ぐ。提案の価値は「誰が言ったか」ではなく、重要な問題や見落とされた関係性を見いだす「内容の力」に依存する。評価中は作者が見えないシステムにより、権力のバイアスを無効化する。

閉鎖集団の「自然な認識限界」



- 不可視の影響力（政府の圧力やスポンサーの要求）だけが問題ではない。
- キュレーターがいかに誠実であっても、自らの「情動的・道徳的環境」という自然な限界に制約される。
- 閉じた部屋の中では、ある視点は自明に見え、別の視点は無関係や危険に見えてしまう。これは汚職ではなく、構造的な認識の限界である。

集合知は、制度の「視野」を拡張する



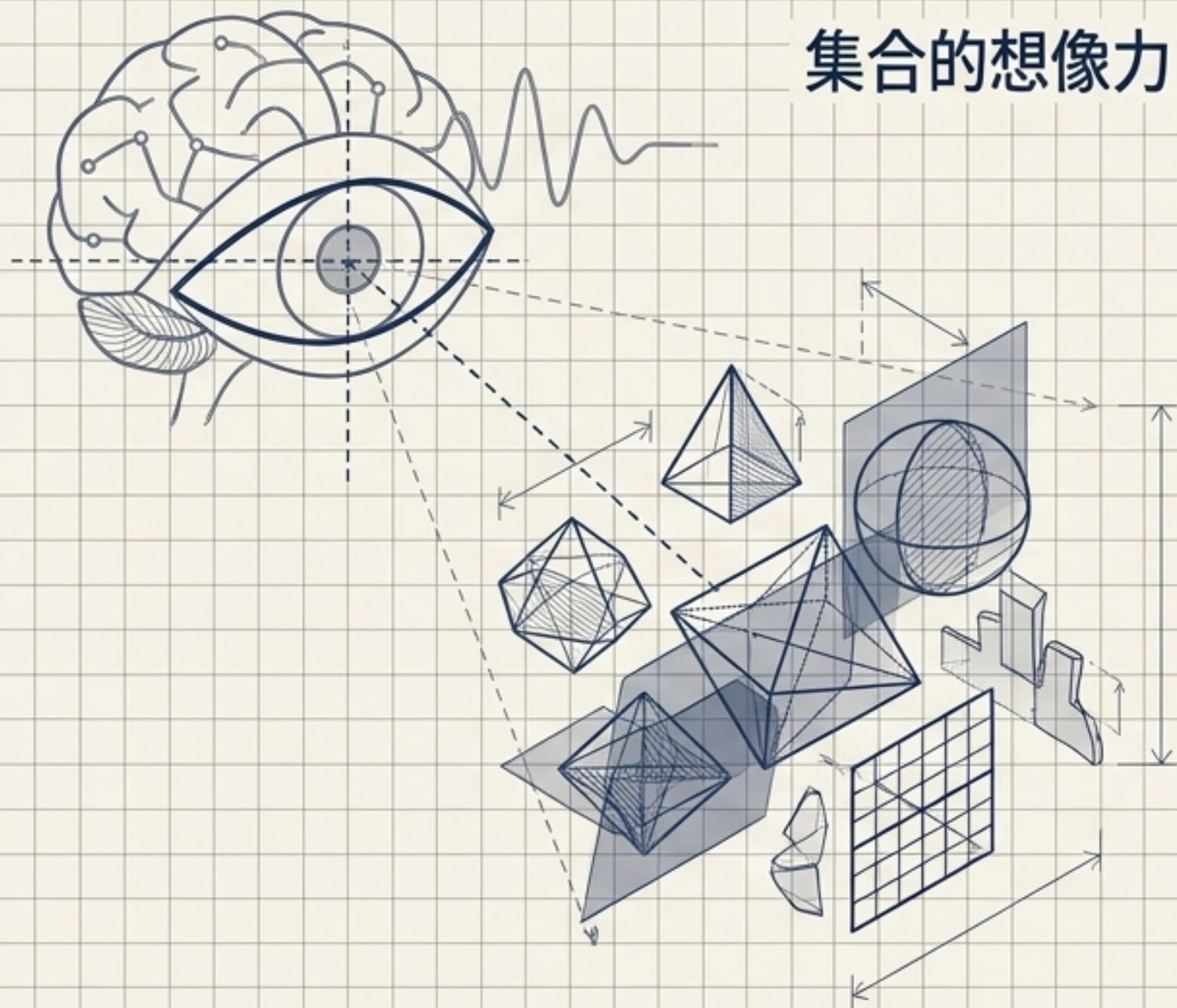
- 権力の分散は、単なる「民主的正当性」のアピールではない。制度が知りうる世界の範囲（フィールド・オブ・ビジョン）を広げるための認知的な拡張である。

検証機能:

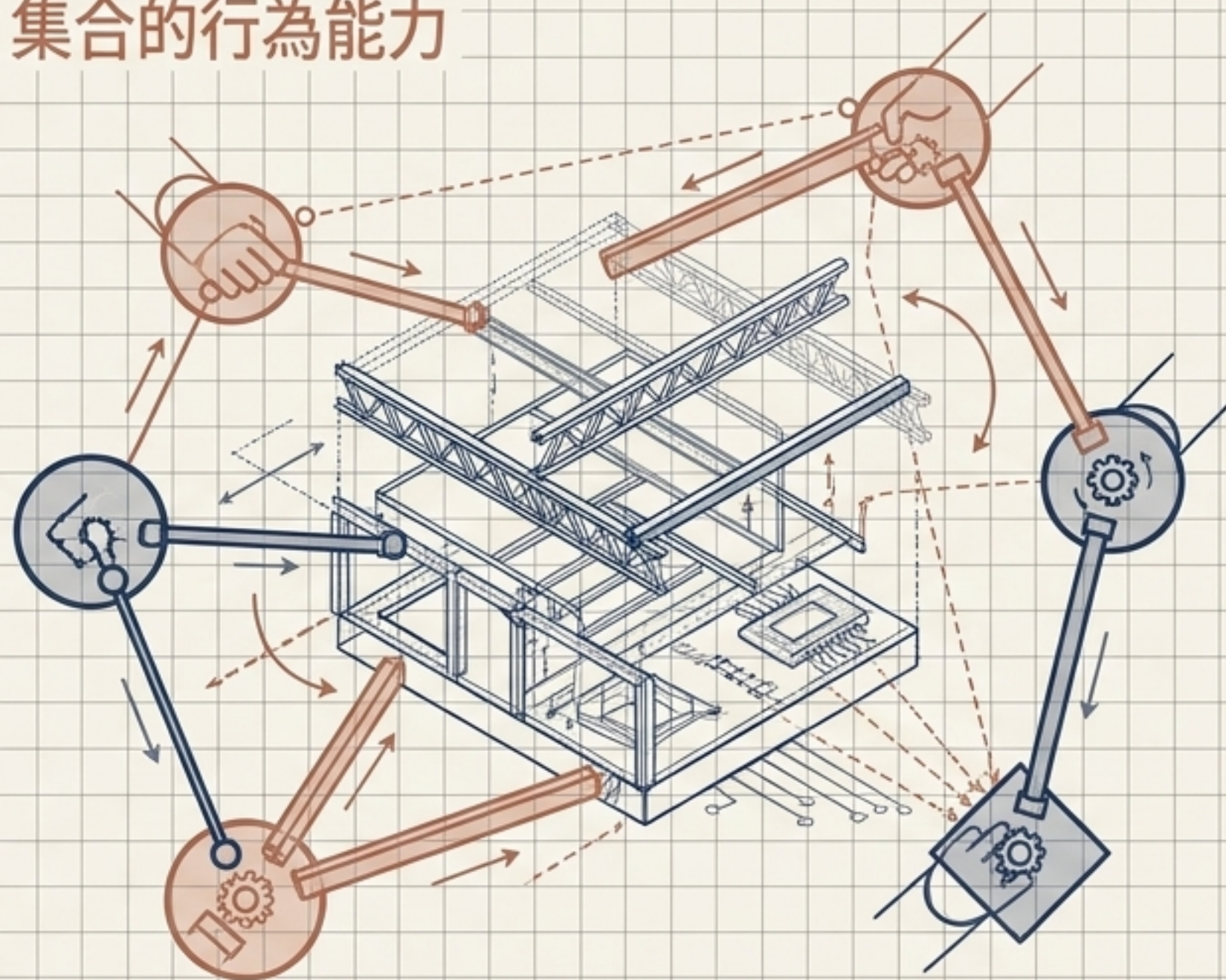
- 展示が単に既存の政治座標を追認していないか？
- 観客の間の不一致は「無知」によるのか、それとも「実在する道徳的緊張」なのか？
- 集合知を通すことで、制度は真の対立と欠落を理解することができる。

「集合的想像力」から、「集合的行為能力」へ

集合的想像力



集合的行為能力



別の現実を「想像」させるだけでは、代案は生まれない。支配的階層のない世界を展示しながら、自らの運営から人々を排除することは可能である。
真のシンポイエーシス（共創）とは、他者とともに生きる姿を「見せる」ことではなく、共有資源を使って他者と「ともにつくる」ことである。

ケアの制度が真に「ポスト階層的」になる時

それは、中心が他者をケアし始めた時に始まるのではない。
何をケアし、何を可視化し、共有資源をどう使うかに、
他者が『実際に作用できるようになった時』にこそ始まる。

ポスト階層的制度のインフラストラクチャー
実践：METACONプラットフォームへ接続